「高齢者の居場所に関する研究 ―男性の居場所に注目して―」

弘前大学人文社会科学部社会経営課程　前田遥紀

1.　はじめに

現在、西暦 2000 年以降に誕生した国民のおよそ 8 割が 100 歳まで生きると予測されており、日本は「人生 100 年時代」に足を踏み込もうとしている。我々は高齢者に目を向け、高齢者が生きる社会について深く考える必要がある。

現代の超高齢社会においては、高齢者にまつわる多様な問題が存在し、その一つとして高齢者の孤立問題がある（斉藤等 2009、本田 2022）。孤立を防ぐために大切なのが、コミュニティカフェなどをはじめとした通いの場を通じての社会参加である(村社 2018、村社 2019)。高齢期の充実には、社会参加を通じての人との関わりが密接に関わっている（長田等 1999、安孫子・原田 2017）。

しかし、通いの場を通じての社会参加は、課題として男性の参加率の低さがたびたび取りあげられる。大久保等（2005）は、男性の参加率の低さや参加者層の固定化を課題として指摘した。そして大久保等は、「茶話・ふれあいサロン系」の通いの場が多いことが、男性の参加率が低い要因の一つであるとした。中嶋等（2019）も男性の参加率の低さを指摘しており、その改善には通いの場でおこなう作業に男性が価値を見いだせるかどうかが重要であるとしている。

このように高齢者の孤立問題の中でも特に男性の孤立が問題視されている。そして、高齢男性の通いの場について考える際には、通いの場の中身が重要な要素である。

そこで本研究では、現場への参加を通じて高齢者の集まりの構造やそこに集う人の行動を明らかにすることを目的とする。特に、場ごとの特徴や男性の場と女性の場の違いに注目して分析し、どんな集まりに男性が参加するのか、男性の居場所とはなにか、ということについて考察していく。

2.　調査概要

対象は、弘前市居場所づくり事業に登録されている高齢者団体 6 つと、弘前市総合学習センターで活動している東部寿大学である。各集まりに参加して活動の様子を観察した。また、一部聞き取りを行い、集まりでの活動や他の参加者との関わりについて伺った。そして、調査から得たデータをもとに、各集まりの比較・分析をおこなった。

表 1：対象まとめ

名称	活動内容	人数	男性
じょっぱり弘前	スポーツ吹矢	12	6
幸の鳥の会	体操・筋力トレーニング	8	2
ヘルシーエイジング	体操・合唱	66	10
若がえろう会	体操・筋力トレーニング	7	0
ニコニコサロン	口腔ケア講座・脳トレ	8	0
日向の家	習字	3	0
東部寿大学	グラウンドゴルフ	12	5

3.　高齢者の集まりでの観察調査

第 2 章では調査対象の概要と、調査方法・分析方法についてまとめてきた。本章では、男性割合ごとに分類をおこない、各カテゴリーの共通点について見ていく。

表 2 に示されるのが、観察を通して明らかになった各カテゴリー別の共通点である。

縦軸には集まりの名称、共通点という項目を配置している。横軸には各カテゴリーの名称を配置している。次章ではこれらの特徴の中で、男性がいる集りに見られた特筆すべき 4 つの傾向について述べていく。

表 2：各カテゴリーの共通点まとめ

	男性40%以上	男性40%未満	男性0%
団体名	じょっぱり弘前（50%） 東部寿大学（44%）	幸の鳥の会（25%） ヘルシーエイジング（16%）	若がえろう会 ニコニコサロン 日向の家
共通点	・役職や役割が明確 ・道具を必要とする種目 ・競技性がある種目 ・毎回同じ活動	・役職や役割が明確 ・活動時間中の会話が無い ・スケジュールに忠実	・参加者が対等な関係 ・プライベートな会話が多い

4. 男性がいる集まりに見られた 4 つの傾向

本章では、観察調査で得た情報から、男性がいる集まりで見られた 4 つの特筆すべき傾向について述べていく。

4-1. 道具にこだわりを映し出すことができる

1 つ目は、「道具にこだわりを映し出すことができる」ということだ。特に男性割合が大きかったじょっぱり弘前・東部寿大学は、どちらも道具を必要とする活動をおこなっていた。よってこの「道具を扱うか否か」という違いが、男性参加を増やすための鍵になると考えられる。

本研究の調査から、男性が道具を重要視していることがうかがえた。寿大学のグラウンドゴルフにおいて、自分のゴルフクラブでプレーをしていたメンバーが、第 1 回の調査では男性 6 名中 5 名・女性 7 名中 1 名、第 2 回の調査では男性 6 名中 5 名・女性 5 名中 1 名、第 3 回の調査では男性 4 名中 3 名・女性 8 名中 4 名確認された。他の参加者は、寿大学で所有している共用のゴルフクラブを使用していた。このように、自分専用の道具を用意しているメンバーの割合は男性の方が高かった。しかもある男性メンバーは、左利き用のゴルフクラブをオーダーメイドで用意して活動に参加していた。というのも、市販のグラウンドゴルフ用クラブは右利きを想定した物がほとんどで、左利き用はなかなか出回っていないのである。右利き用の物で我慢して使うという選択肢があったにも関わらず、わざわざオーダーメイドで用意しているということから、その男性の道具に対するこだわりが見て取れた。

じょっぱり弘前のスポーツ吹矢においても、同様に道具に対するこだわりが見て取れた。スポーツ吹矢では筒・矢・筒立てなどを各自で用意する必要がある。筒と矢には規定があり、手を加えると昇段試験や大会で使用できなくなるため、メンバーは筒立てや筒を持ち運ぶための袋、矢を入れる袋などに各自のこだわりを映し出していた。じょっぱり弘前のある男性メンバーはカメラスタンドを改造し、筒・矢・筒磨き布・矢抜きをセットできる筒立てを自作していた。また彼は、妻手製のこぎん刺しで作られた筒入れを使用していた。自作した道具と家族に作ってもらった道具を愛用している様子から、この男性は特に道具にこだわっていることがうかがえた。さらに、ある女性メンバーは矢を保護するためのスポンジに和紙を用いた装飾を施しており、調査時のメンバーは全員、女性メンバーが装飾を加えた矢保護スポンジを所持していた。

ここまでじょっぱり弘前・東部寿大学のメンバーが扱う道具へのこだわりについて述べてきた。先行研究や実際に活動の場で観察をおこなった本調査の結果から、「道具に

こだわりを映し出すことができる」ということが、たしかに男性の参加に良い影響をもたらしていることがうかがえる。

4-2.　競技性のある種目

2 つ目は「競技性のある種目」だ。本研究で扱った高齢者の集まりの中で、特に男性割合が大きかったじょっぱり弘前・東部寿大学は、競技性のある種目をおこなっていた。種目の競技性が、男性参加を増やすための鍵になると考えられる。

その根拠の 1 つとなるのが、じょっぱり弘前のメンバーの大会参加経験である。より詳細に記述すると、じょっぱり弘前 3 支部のメンバーについて、公式大会の出場経験の部分で男女に差が認められたのである。合計で男性 6 名、女性 6 名に聞き取りをおこなったが、男性は全員が大会経験者であるのに対し、女性は半数が大会未経験者であった。さらに男性メンバーの一人は、自宅に練習場を設営し、国体への出場を目指して毎日練習に取り組んでいるとのことだった。一方で女性メンバーの 1 人は、じょっぱり弘前以外の、スポーツ吹矢をおこなっている団体に参加しているにも関わらず、大会への参加経験が無いとのことだった。また、大会未経験の女性 2 人はスポーツ吹矢を始めて 1 ヶ月半だが、大会への出場は考えていないとのことだ。

上記のようにじょっぱり弘前では、大会経験の違いから競争意識や上達意識の性差が見て取れた。競技性のある種目に男性が熱中しやすいことは、過去の研究でも指摘されている。中嶋等（2019）は、男性が好む活動の特徴として、「課題志向性が強い」「目的が明確である」「達成状況や成果を可視化しやすい」「自己像や自己の能力が表現できる」などを挙げている。これらの特徴は、スポーツ吹矢やグラウンドゴルフといった競技性のある種目に通じている。

以上から、「競技性がある」ということが、男性を活動に熱中させる要因の 1 つとなる可能性が高いと言えるだろう。

4-3.　メンバーが役職・役割をとる

3 つ目は「メンバーが役職・役割をとる」というものだ。男性がいる集まりには、共通して「役職や役割が明確」という特徴があった。男性がいる集まりでこの特徴が現れることは、既存研究においても指摘されてきた。高齢男性を対象に、日常で価値を置く作業に関する半構造化面接をおこなった中嶋等（2019）は、高齢男性が好む活動の特徴として、「集団内の自己の位置づけに応じた役割を遂行する」「社会や組織と呼べる枠組みが明瞭に構造化されている」を挙げている。これらの特徴は、本研究で男性の集まりに共通して見られた「役職や役割が明確」という特徴と合致している。このことから、高齢者の集まりにおける男性参加を増やすためには、メンバーに何らかの役職・役割を持たせることが重要になると考えられる。

4-4.　集まりの目的が明確

4 つ目は「集まりの目的が明確」ということだ。具体的には、活動目的やスケジュールが明確な集まりである。つまり、「そこに集まって何をするか」がはっきりしている集まりだ。これにあてはまるか否かで、新規参入のしやすさは大きく異なるだろう。

本研究で扱った男性のいる集まりは、女性だけのものよりも活動目的が明確なものや、スケジュールが定められているものが多かった。例えば、男性が多かったじょっぱり弘前・東部寿大学は、種目をスポーツ吹矢・グラウンドゴルフに絞って活動しており、その集まりでなにをするかが明白であった。ヘルシーエイジングは事前に活動内容やスケジュールをチラシにして配るほどの徹底ぶりで、こちらも集まりに参加する前に、そこで何をするかが明白であった。このような集まりであれば、男性も参加しやすいのかもしれない。

5.　　男性の居場所とは

前章で男性のいる集まりの傾向について確認してきた。キーワードでまとめると、「役職・役割」「道具」「競技性」「目的が明確」となる。これらをもとに、「男性の居場所」について考えていく。まずは「男性の居場所とは」という問いに対する、筆者が考える答えを示しておこう。男性の居場所とは、「趣味性」「競技性」「社会性」3 つのベクトルがある「自己表現の場」である。

まず「趣味性」ベクトルの居場所について説明する。このベクトルには彼らが扱う道具が関連している。じょっぱり弘前・東部寿大学などの道具を必要とする活動をしている集まりでは、特に男性が活動に用いる道具にこだわっているようだった。このことから男性は、道具を探す・選ぶ・使う行為に楽しみやこだわり（趣味性）を感じていることがうかがえる。ひいては、道具を通じて自分だけのこだわりや個性を表現できることが、男性が活動に熱中するための要素の 1 つであり、男性がその集まりを居場所だと思うための条件の 1 つだと考えられる。

次に「競技性」ベクトルの居場所についてである。このベクトルには種目の競技性が関連している。スポーツ吹矢・グラウンドゴルフなどの競技性のある種目で活動している集まりでは、男性参加が多かった。競技性のある種目では、成績の伸び縮みや優劣が明確に現れる。このことから男性は、競技性のある種目で、自身の成長（成績向上や体力向上）や他人との競争に楽しみや喜びを見出しやすいことがうかがえる。ひいては、競技性のある種目で自身の成長や他者との競争を通じて自己の能力を表現できることが、男性が活動に熱中するための要素の 1 つであり、男性がその集まりを居場所だと思うための条件の 1 つだと考えられる。

最後に「社会性」ベクトルの居場所についてである。このベクトルには集まりの目的と、役職・役割が関連している。そしてこの「社会性」ベクトルには、「集まりそのものの意義」と、「集まりでの自分の存在意義」という 2 つの側面があると考えている。

まずは前者の「集まりそのものの意義」という側面について説明する。こちらには集まりの目的が関連している。「社会性」ベクトルにおける「集まりそのものの意義」とはつまり、その活動にどんな社会的な価値があるか、ということである。「社会性」ベクトルの集まりについては、本研究では合致するものが無かった。だが、地域の子育てサロンに参加する高齢者について研究をした森下（2013）は、「彼らは協力員としての役割を通じて自分自身の経験や知識を主体的に活用することが若い世代に求められること、そして世代を超えた交流によってそれが継承されるのを実感するのが、自信や元気の源になっている。」としている。森下の事例は、若い世代に対し自らの経験や知識を継承しているという意味で、社会的に価値のある活動である。このように活動の社会的な価値を実感することにより、たとえ道具にこだわらなくとも、競技性のある種目で自己の成長や他者との競争をせずとも、男性が活動にやりがいや充足感を感じるのではないだろうか。ひいては、彼らは社会的に価値のある活動を通して自己の存在意義を表現しており、それがやりがいや充足感につながっていると考えられる。それこそがその集まりを居場所たらしめる条件の 1 つだと考えられる。

そして後者の「集まりにおける自分の存在意義」という側面についてである。男性参加があった集まりでは必ず役職や特定の役割をとるメンバーが存在し、一部例外を除き、必ず男性がその役職や特定の役割についていた。この役職や役割というのは、多くの男性が社会人生活の中で経験してきたであろう、役職や役割をとって互いが相互に関係を持ちながら、共通の目的を持って仕事に取り組んできた経験に沿うものである。こういった役職や役割という枠組みは、個人の存在とその意義を補強するものであり、すなわち自己の存在意義を表現する手段である。男性の多くは過去の会社勤めなどの経験から、自分がその枠組みにはまることに安心感や充足感を得るのではないだろうか。そして枠

組みにはまりながら自己を表現するという安心感や充足感が、男性にとってその集まりを居場所たらしめる条件の 1 つだと考えられる。

ここまでの考察についてまとめておこう。男性の居場所には 3 つのベクトルが存在し、その種類は「趣味性」「競技性」「社会性」に分かれている。趣味性ベクトルの居場所において男性は、自己のこだわりや個性を表現している。競技性ベクトルの居場所において男性は、自己の能力を表現している。社会性ベクトルの居場所において男性は、自己の存在意義を表現している。男性の居場所とはつまり、「趣味性」「競技性」「社会性」という 3 つのベクトルがある「自己表現の場」のことである。

今は人が 100 年生きる時代である。これからさらに「高齢者」の年齢層も広がり、高齢者の居場所は多様化していくと考えられる。本稿で扱った高齢者の集まりは、60～80 歳代の高齢者が中心であったが、これからは 90～100 歳代の高齢者が多く出てくるだろう。彼らは自分より若い高齢者に混じって集まりに参加するのだろうか。身体能力や認知能力から考えると、おそらくそれは難しいと思われる。そもそも今までの「居場所」の考え方が塗り替えられるかもしれない。しかし何にせよ「居場所がある」ということが長い人生を豊かにする上で重要な意味を持つことは確かである。

参考文献

安孫子尚子・原田小夜、2017、「自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ」、『聖泉看護学研究』vol. 6、pp. 9-18.

大久保豪・斎藤民・李賢情・吉江悟・和久井君江・甲斐一郎、2005、「介護予防事業への男性参加に関連する事業要因の予備的検討」、『日本公衛誌』第 52 巻 第 12 号、pp. 1050-1058.

長田篤・山縣然太朗・中村和彦・宮村季浩・浅香昭雄、2005、「地域後期高齢者の主観的幸福感とその関連要因の性差」、『日本老年医学会雑誌』36 巻 12 号、pp. 868-873.

斉藤雅茂・冷水豊・山口麻衣・武居幸子、2009、「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」、『社会福祉学』第 50 巻第 1 号、pp. 110-122.

中嶋克行・坂上真理・坂上哲可・仙石泰仁、2019、「地域に住む要支援高齢男性が価値を置く作業の特徴に関する質的研究」、『作業療法』第 38 巻 3 号、pp. 266-276.

村社卓、2018、「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性 ―ボランティアの「楽しさ」に焦点を当てた定性的データ分析―」、『社会福祉学』第 58 巻第 4 号、日本社会福祉学会、pp. 32-45.

村社卓、2019、「大都市における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性―利用要因および利用に伴う変化に焦点を当てて―」、『社会福祉学』第 60 巻第 2 号、日本社会福祉学会、pp. 78-90.

森下義亜、2013、「都市高齢者の義捐的社会参加とコミュニティ形成」、『現代社会学研究』第 26 巻、pp. 39-54.

本田由紀、2022、「中高年男性の孤立注視を」、『日本経済新聞』8 月 2 日発行、p26.